

成果と課題

1 成果

☆多くの授業実践を交流し、体育の授業改善に取り組むことができた。

☆キーワードである「かかわり合い」を意識し、互いに認め合う、より良いかかわりを生み出すための工夫を取り入れることで、ほめ合ったり励まし合ったりする姿が増えた。さらに、技能面でも声をかけ合ったり教え合ったりする姿が見られるようになってきた。そして、運動が得意な子も苦手な子も共に一つの目標に向かってがんばることができ、楽しさや喜びを共有する機会も増えてきた。意欲を持って取り組む児童も多くなり、主体的に体を動かす児童の姿が見られるようになってきた。



☆授業の基本スタイルが確立されたことで、学習がスムーズに流れ、話し合い活動を取り入れつつ運動量も確保できる授業が定着してきた。学習カードの活用でしっかりめあてを持って学習に取り組む児童が増えてきた。さらに、掲示物の工夫や声かけで、それを持続したまま学習に取り組めるようになってきた。

☆年間指導計画を見直し、さらに、学習内容の系統表、ひきつぎカードの作成により、計画的系統的に取り組めるだけでなく、子どもの実態に応じた指導ができるようになった。

☆体育の授業以外でも学校生活の多くの場面で運動する機会が増えるように努めた。その結果朝の体育集会「大野っ子タイム」では、基礎体力の向上・運動の日常化・異学年との交流などを目標に全校で楽しく運動したり遊んだりできた。また、「きのくにチャレンジランキング」に挑戦したことで、各学級学年で力を合わせて記録に臨み、連帯感と運動への意欲を高めながら取り組むことができた。



☆手作り遊具を設置し環境を整えたことで、子ども達が興味を示し、楽しく遊ぶ姿が見られるようになってきた。また、遊びを掲示して紹介したり、「遊具でトライ」の時間を設定したりして、外遊びを奨励し、生活や遊びの中で体を動かす機会を増やしていくことができた。さらに、時折整備するなど働きかけることで、飽きることなく遊びが持続できてきた。

2 課題

- ★積極的に友達とかかわり、元気に体を動かす活気のある授業になってきてはいるが、一人ひとり人を見たとき、自信なく受け身になりがちな児童もいて、全ての児童に当てはまるまでは達していない。個々の児童に応じた支援の在り方を考えながら、さらに、学習活動を工夫していかなければならない。
- ★体づくり運動では、教材・教具・場の設営をどう工夫していくかが難しかった。児童の実態に合わせ、身に付けさせたい動きを見極めて計画的・系統的に学習内容を考えていきたい。特に低学年では、夢中で遊び込む仕掛けを取り入れながら、よい動きのコツを共有し基本的な動きを身に付けさせたい。また、複数の場での活動が多く、見取りも難しかった。めあてをより具体的にし、評価に生かせるような学習カードを工夫していく必要がある。
- ★ゲーム・ボール運動では、基本的なボール操作ができて、それをゲームの中で活用できないことがあった。動き方がわかるようになるため思考力・判断力を身に付けさせる必要がある。そしてそれを活かせるようにグループでの練習の仕方を工夫しなくてはならない。また、技能面での差が大きく、学年が上がれば意欲の差もでてくる。差を埋めるための教材・ルールの工夫が必要である。そして何より、より良いかかわり合いが生まれるような授業作りに努めていく必要がある。
- ★「運動の二極化」対策として、引き続き運動の日常化をめざし、生活や遊びの中で体を動かす機会を増やしていくが、マンネリ化しないような改善が必要である。



「かかわり合い」を大切にして「運動の楽しさ・できる喜び」をテーマに学校全体で取り組みを進めているところである。その結果、体育の授業はもちろん、休憩時間等、学校生活の多くの場面で、元気よく声をかけ合ったり、生き生きと体を動かしたりする児童の姿が見られるようになった。

H27年度・H28年度の新体力テストの分析結果（資料参照）を比較してみると、国・県ともに平均を上回る項目数が5から28と5倍以上増やすことができた。判定別人数分布一覧を見ても、男子・女子とも、ABC判定が増え、DE判定が減った。子ども達の体力が順調に向上してきているというのは大きな成果と言える。しかし、ようやく平均的な体力になったところで、今後もさらに体力向上に努めなくてはならない。そして今後は「できる喜び」が実感できるように技能を向上させる必要がある。「かかわり合う」「高め合う」ことで「運動の楽しさを実感する」「できるようになる」そんな大野っ子をめざしていきたい。